

洛友會々報

京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気工学科教室内
洛友會

六月二日(土)教室懇話会春季大会が高雄清
滝方面ハイキングで催された。前方は野田大
老輩のかくしゃくたるお姿である。



随感

黒部の今昔

昨夏三十年ぶりにかねて望んでいた黒部行の目的を果たすことができた。関西電力の案内で、京大の平沢総長、横田局長、西村渉外主査の諸氏と行をともししたので、私には専門の見学旅行でありながら、一面またなごやかな旅行を味わうことができた。

私はこれまで二度黒部へ行ったことがある。大正の末と昭和の初めである。その当時は鱒釣温泉までは楽に行けたが、それから先は千じんのがけつづちにかかる棧道を、岩をかむ奔流を眼下に、千古の雪溪を右手にながめながら、わらじ脚絆(きやはん)姿で、はうようにして歩んだものである。猿飛付近のつり橋にかかった時、同行の大竹教授が「ぼくにはこれほどでも渡れないから、かまわずに行ってくれ」というものだから、残したままで祖母谷まで行って、露天風呂につかったことをおぼえている。

そんな黒部であったが、今度行つて見ると、宇奈月から大町へでも、大町から宇奈月へでもジープと電車で、旧ながらの絶景のなかを楽々と往き来できるのには全く驚いた。この峡谷の開発に手をつけたのは四十年前であったと思うが、人間はも

鳥養利三郎

とより、かもしかできえ通れないといわれた絶壁だから、まず飛行機で見取り図を作り、ついで棧道を築いて一歩一歩測量を進めて行ったと聞いている。

この三十年の間に、多くの発電所が順次溪谷ぞいに造られるにつれて、電車も奥へ奥へと延びて行って、とうとうさすがの秘境にも楽々と人間を出入りさせるようになり、その上、大町から起工せられた輸送路の難工事が打開されたために、世界にほこるべき第四発電所の完成を見、数十年かかった黒部の開発も、これで目出たし終わりを告げたことになるのである。

流路八六キロメートルという、さまで大きくない川で、七〇万キロワットという大電力を発生できるのは、黒部なればこそである。この開発のために山も溪も切られたり埋められたりして、折角の風光も合なしになったのではないかと心配する人もあるかと思うが、地表面にあらわれた限りでは少しも変わったところはなく、全く旧ながらの黒部である。のみならずダムが造り出した碧の湖面にしゅん峰立山の姿がはえるといふ、雄大な勝景が新たに加えられたのであるから、得るところがかえって大きいわけである。建設用の輸送路も、ダムと発電所との連絡路

も導水管も、また発電所そのものさえも、すべて地下に埋設せられて、何物も露出してはいない。黒部は旧のままの静けさにある。が、その景色に見とれている人の脚下の地下堂屋内には、世紀の大水車がごう音立てて回っており、変圧器がうなつているのである。そして、そこから数十万キロワットの電力をわれわれのために送り出すのである。

このような技術は一朝一夕にかん養できるものではない。数十年、地味に一歩一歩積み重ねた経験の集積があつて初めてよくし得るものである。これこそ高く評価せらるべき、また世界にもほこるべき価値ありといえるのである。

世人は一体気が多く奇を好む。また調子にのりやすい。昨日は南極、今日はロケット宇宙開発だ。そして現実の足下を見ようとはしない。黒部開発の技術的価値は、ロケットや宇宙問題のそれに対比して、さほど上下の差があるものではない。いたずらにうわづつてばかりいないで、日常の生活に直結する地味な問題での苦労にも、もう少し目をむけてもらいたい。

めづらしい人格者

最近ジャパン・タイムスの福島慎太郎社長の書かれた「デニソン」と題する一文を見て、いたく心をうたれた。外務省顧問であつたヘンリー・ウィラード・デニソンというアメリカ人を追想せられた短いものであるが、むかしこんな人がいたのかと

大いに教えられるところがあつた。

デニソンは明治初年にアメリカの副領事として日本へ渡来、明治十三年井上外務卿に望まれて顧問となりそれ以来大正三年に亡くなられるまで三十五年の間、日本外交を直接指導された。青山墓地に葬られ、今もそのまま苔むした墓碑の下に眠っている。たいへんな読書家で、多くの蔵書は後に首相となつた幣原さんに譲られたが、惜しくも戦災で焼けてしまつたそうである。日本の興隆期たる明治時代の外交には、彼の関与しなかつたものはないといわれる。

条約改正、下関条約、日英同盟、ポーツマス条約など、日本の運命をかけた重大な外交文書はすべて彼の起草にかかると伝えられている。ポーツマスへは小村外相に随行しているところが誠に不思議なことに、いま外務省に残っている文書をいくらか調べて見ても、彼が書いたという証拠の残っているもの、あるいは彼の名の記されているものは何一つ発見されない。そこでさらによく調べて見ると、外交上の功績というものは歴代の外相の名に冠せらるべきであつて、デニソンなどという名が少しでも残つてはいけないといつて、生前にみづから焼いてしまつたと伝えられているのである。

以上は福島氏がロータリーの友三月号にのせられた「デニソン」のあらましである。ここに骨を埋めて永久の住みかたにしようと思つたほどに愛した日本をして、幾多の難関を乗り越えさせ

た手柄話の山ほどあつたに、そのかけらほどをも語ろうとしないのみか、自分の名をさえ残すまいために、書類を焼き捨てたというにいたつては、その心情の高潔なことむしろ偏狹にすぎるとさえ思われる。ほんのちよつと関係しただけで「あれはオレがやつた」と手柄顔したがる者だけのいまの世の中では、デニソンのような人のいたことは想像もつくまい。彼はよほど精神修養の出来た。そして縁の下力持ちに徹しきつた人であつたのであろう。

日本がこれほど早く近代化され、また学術文化産業において、こんな急速に伸展したのは、日本人みずからの力によるものであることはいうまでもないが、一面またデニソンのような私心のない人格高い指導者によつて、正しい方向に基盤づけられたことが大きな原因となつていて見なければならぬ。明治時代には各局面において、外人顧問の指導を受けたようだが、いずれも専門の造りかたが深かつた上に、心から日本を愛し、この国の発展のために何物をも捧げようと希企された人が多かつたのは、われわれの大きな幸いであつた。これらの人々の功業の中には、いまもなお日本に生きてい

るものが相当多いようである。戦後力づくできびしくわれわれを指導した占領軍の残した仕事、今日では早くもその大部分がかけをひそめつつあるのと対比すると、むかしの顧問達の愛情と人格からほどばしりてた指導力の偉大さが下がる。

世界の情勢はずつかり変わった。むかし外人顧問に育てられた日本にも、いつのまにか後進国を指導する役目が回つてきたらしい、こゝでわれわれがむかし受けた経験をよく思い出して、後日、彼らから感謝されるような親切なそして適切な指導援助を与えるようにしたいものである。

カバンの行くえ

今年の一月ごろ感冒が長びいたりして、回りの人々に大分心配をかけたが、陽気と共に元通りに元氣になつて、このごろではまた月に二度三度と東京通いをつづけている。

頻年夏であつたか、東京行きが頻繁になるときまつた時、私がそれを喜ばないばかりか、文句をいってると伝えきいた親セキの者から、お前のごとき老いばれを相手にしようという物好きは、そうめつたにあるものではない。ひつぱり出して用をさしてやろうというの、よつぽどのご厚意があればこそだ。ありがたく思ひなさいときついお小言をちよつだいした。なるほどと感心もし反省もして、爾来比較的すなおにせつせと通つていこうわけである。

ところが、犬も歩けば棒にあたる。行けば行つたでそれ相應の功德がある。用務以外に色々のためになる話も聞けるし、また平素忘れ去つてゐる昔の思い出がふと心に呼びもどされたりもして、例えばこの「随感」の種位はたやすく仕入れること

が出来ものである。先日も文部省で某局長と雑談していたらこんな話が出た。東京駅で年とつた西洋婦人が大きなカバンを重そうに持つてゐるので、見るに見かねて持つてあげようとした。ところが持ち逃げされるとも感じがしいのか、こわいけんまくでにらみつけられたのである。「あの時は全くなげなかつた」とその局長はこぼしてゐた。この話から思いついて旅のカバンに関する思い出を一つ二つ書いてみよう。

大正十三年の電気の卒業生の中に虞紹店という中国留学生があつた。在学中私の宅へも度々出入りしてゐたが、日本へ着いた時一番強い印象を受けたのはどういふことであつたか私が問うたのに対して、彼は横浜へ上陸した時の話をした。あの当時彼の国では駅や港で赤帽に荷物を持たせるのは危険なことのつになつていたらしい。どこへ持ち逃げされるかわからないのである。ところが船へ出迎えた先輩留学生が、彼の大事にしてゐる荷物をドンドン赤帽に渡すものだから全く気が気でなかつた。が、税関へ行つて見るとそれがチャンと運ばれていたのでやつと胸なで下したが、赤帽を疑つてかかつたことがつづく恥ずかしくなつてきた。その日以来この日本には安心して住めるといふ気がわいてきたというのである。大戦後同君の消息を絶つたのは残念でならないが、同君を思う時、いつもこの赤帽を通じて国際の一件が私の心に浮ん

でくる。虞君の横浜上陸の前後、大正十年に私はスウェーデンを旅行した。ロンドンで知りあつたスウェーデンの友人が同行してくれた。ゲートボルグから汽車で北上するために駅へ行つたが、発車までにまだ二時間も間があるといふので、市街を一巡して来る事になつた。その時友人はカバンをこのままプラットフォームに残して置こうといふ。それは日本ではな

るかほんの三分間でも目をはずさうものなら、どうなるかわからない。ところが「スウェーデンには人のカバンをかつぱらうようなバカは絶対にいない」といひはる。とうとう私が虞君の役に回つて、気をもみながら街を歩いてくるはめになつたのであるが、二時間後に帰つて見ると、カバンは置かれた位置にそのまま厳然として吾等を待っていた。

スウェーデンも日本も中国も皆それぞれ変わったであらう。今はどうなにか知らないが、こういふちよつとした話も私にはなつかしい思い出である。

昭和三十七年度会費徴収について

本会報には昭和三十七年度の会費徴収について払込票を同封してありますからお忘れなくお払込み下さい。なお、前年度およびそれ以前の会費未納の方には合算して請求いたしましたから、これまたお忘れなくお払込み下さい。

第十一回洛友会総会の記

五月十九日(土)午後三時より新緑薫る目白の椿山荘において第十一回洛友会総会が盛大に催された。

鳥養会長は差支えのため御欠席になつたので副会長佐藤穂徳氏が議長となり、昭和三十六年度收支決算並びに昭和三十七年度收支予算を付議し、説明の後、満場拍手裡に承認可決せられた。

ついで、役員選挙の件については議長指名による詮衡委員七名に依ることとなり、乙葉真一、渡辺兼雄、橋本真吉、安達遂、小柳美一、大谷泰之、山村忠行の七氏が指名され、審議の結果を乙葉委員長より会長は重任とし、副会長は佐藤穂徳、清水勲二、林重憲各氏は重任とし、新たに芦原義重氏を推薦することになったと報告し、満場の拍手裡に可決した。

ついで、本会は満十年を迎えるに当り本会の創立より会の発展に尽力せし方を表彰せよとの動議があり、議長は詮衡委員として堀岡正家、渡部兼雄、橋本真吉、安達遂、小柳一氏を指令した。堀岡委員長より審議の結果、山村忠行、乙葉真一両氏に感謝状と記念品を贈呈することに決したと報告し、議長これを議場に諮り、満場の拍手裡に可決した。

これにより、山村、乙葉両氏は交立って、その御厚意は感謝するもなお本会の基礎を確立するために折角努力中であつて記念品など頂くべ

きものでないから、()を願いたい旨申し出た。

これによつて議事を終り、会場の周廻にしつらえた横擬店に舌鼓をならし、お互に健康を祝しつつ歓談に時を移した。

宴前にして西川舞踊団の民謡踊とブラスバンドは一段の興をそえた。終りに、大先輩宝来勇四郎氏の発声により、洛友会万歳の三唱して散会した。時に午後七時。

出席者

- 宝来勇四郎 大森 丙 佐藤 穂徳 綿谷 吉松 長島正隆 中谷 潔 石黒 九一 真崎尚忠 小柳 助治 保寿 康象 大西冬蔵 上林 一雄 山村 忠行 久高将吉 乙葉 真一 橋本宗次郎 間崎竜夫 山口 信助 高見 祥平 堀岡正家 福島秀次郎 渡部 兼雄 庄野誠一 高田三三郎 松野 保登 田中 登 樋口竹太郎 西原 藤吉 岡本一郎 平井寛一郎 橋本 真吉 富永和郎 吉田喜久次 石川 辰雄 堀内多雄 吉田喜久次 安達 遂 伊達 達 真壁 昌一 和田 正弘 藤田 真 石堂 昌一 石垣 梯次 小柳美一 松井 登兵 吉岡 俊男 西山安三 丸 恒造 田井 弘文 平風正男 丸 保一 石川 弘文 正木知巳 平田 稷 大谷 泰之 水野正光 副島 敏夫 松尾 三郎 山本 清 北爪 隆夫 肥後 大介 相木一男 山村 竜男 村上 孟 清水照久 市原 竜博 三浦 誠一 吉田正彦 小刀 一晃 井上 誠一 武藤良介 白杉 道夫 船越 利昭 荒木 翼 筑後 茂夫 小山 利昭 黒見尚行 筑原 元久 児玉 光宏 千葉常世 馬場征彦 萩野 正規 近藤 健 馬場征彦 竹中 理 浅賀 春一 岩下方議 吉田 寛一

昭和37年度收支予算

Table with 4 columns: 科目, 予算額, 前年度決算額, 合 計. Total budget: 2,824,446. Total previous year: 3,040,926.

昭和36年度收支予算

Table with 4 columns: 科目, 予算額, 決算額, 合 計. Total budget: 2,958,742. Total actual: 3,040,926.

洛友会東京支部総会記事

本支部総会は五月十九日(土)椿山荘において本部総会に先だつて午後四時より開催した。

幹事より三十六年度行事並に決算報告を行つた後、三十七年度行事予定の説明を行ない満場一致で承認可決せられた。本年度の新卒会員三十八名の方を招待し紹介を行なう予定であつたが勤務の都合等で殆んど出席されなかつたのは残念であつた。(北爪記)

預金および現金

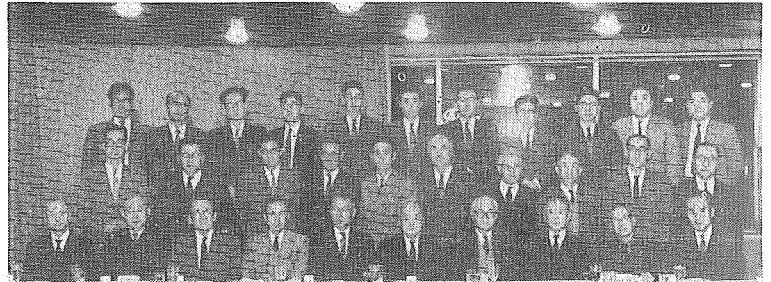
Table of financial data: 定期預金 1,000,000, 普通預金 622,502, 当座預金 4,690, 振替貯金 152, 立替金 176,422, 現金 680, 合計 1,804,446.

支出の部

Table of expenses: 刊行物費 752,692, 印刷費 440,000, 送金費 173,444, 集金費 10,015, 送金費 39,000, 送金費 70,403, 品信費 21,800, 品信費 1,973, 品信費 6,500, 品信費 149,774, 品信費 62,941, 品信費 96,000, 品信費 124,800, 臨時補助費 20,000, 臨時補助費 20,000, 臨時補助費 40,000, 臨時補助費 1,772,742, 臨時補助費 1,804,446.

支出の部

Table of expenses: 刊行物費 752,692, 印刷費 440,000, 送金費 173,444, 集金費 10,015, 送金費 39,000, 送金費 70,403, 品信費 21,800, 品信費 1,973, 品信費 6,500, 品信費 149,774, 品信費 62,941, 品信費 96,000, 品信費 124,800, 臨時補助費 20,000, 臨時補助費 20,000, 臨時補助費 40,000, 臨時補助費 1,701,446, 臨時補助費 1,804,446.



洛友会九州支部

三月二十七日桜花はころぶ福岡の地に林先生並に山村幹事をお迎えして本支部総会および懇親会を開催した。

まづ、高柳支部長の挨拶のあと、林先生より電気、電子両教室の近況のお話があった、ついで山村幹事より洛友会の近況ならびに洛友会名簿作成についての苦心談などがありました。

次に会則の一部変更および任期満了に伴う支部役員改選案が提出され、評議員は支部長に一任することとなり、他は提案通り満場一致で承認されました。当日の参会者は会員二十九名で懇

親会にうつり、定例の自己紹介に始まり、珍談奇談がとび出して、なかなかの盛況裡に春の宵は洛北に遊びし吉田山時代の思い出と共に更けてゆきました。なお、会場は河本社長の御厚志により天神ビルの特別サービスに預かったことを感謝します。(深町藤吉記)

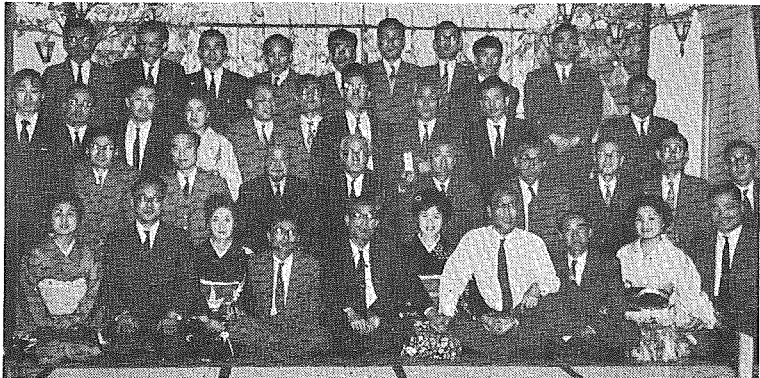
総会記事洛友会中国支部総会記事

中国電力技術懇談会のため御来広になった林(重)、木島、卯本の諸先生をお迎えし、山村本部幹事の御来駕を得て、四月十三日午後六時より広島市の北西、太田川河畔、名勝三滝観音のある三滝山荘に於いて三十七年度総会を開催した。

真田支部長のあいさつに始まり、林先生、山村幹事の近況報告があり、三十六年度会計行事報告のあと、三十七年度役員改選について、今年度から会の運営を活発に行なうため卒業年次の古い会員は勿論、新たな若い会員よりも幹事を選出したい旨の提案があり、全員一致で次のとおり決定された。

当日は小雨模様で春雨とはいえ肌寒い日であったが、宴たけなわになるにつれ、会場は熱気をおび、自慢のかくし芸がつきつきと披露され和気あいあいの中に散会した

- 役員 顧問 鈴木 貫一 支部長 真田 安夫 幹事 木村 一男 高橋 親雄 添田貫一郎 潮見 公安(総務) 古賀 七郎 松谷健一郎(庶務) 井上 武(庶務) 梶谷 守男(会計) 門野内忠幸 橋本 吉昭 仁木 可也 井上 幸夫 三田 徳平 出席者 林(重)先生 木島先生 卯本先生 山村幹事 光岡 彰(大11)岡田 邦彦(大13) 佐川 重雄(大14)木村 一男(大15) 真田 安夫(2)高橋 親雄(4) 竹内 貞美(7) 潮見 公安(8)



- 古賀 七郎(15) 滝口 哲朗(16) 井上 武(16) 松谷健一郎(16) 江見 耕平(17) 大月 清一(20) 江本 文明(21) 小川 清(22) 梶谷 守男(22) 上米良宮夫(23) 門野内忠幸(23) 石田 隆弘(25) 梶谷 守男(25) 橋本 吉昭(25) 戸川 一義(25) 野中 清文(26) 久保 淵(29) 池内 浩一(28) 仁木 可也(27) 奥沢 祥弘(30) 秦 祐夫(30) 井上 幸夫(31) 村尾 久(33) 川村 修(35) 高橋 広市(講41) 計三十七名 (梶本記)

卒業十二年記念会

昭和二十五年会 十二年とは奇抜で良いなあ！と卒業以来初めて一堂に会したのは十九名。実は当然予定していた十周年記念が、二年延びてしまった次第です。

それだけに準備は充分で、既に昨年十一月京阪神の有志十一名が鳥羽三で準備委員会を発足、今年一月から記念会の案内書を配って会費積立をお願いし、四月に出欠を確認する傍ら大学諸先生に予約、と手順は好調に進みました。期日は例によって春の連休としましたが、内容はぐっと盛り立てて五月四日夜を桶荘新館で会食遠地者は同夜一泊して五日はバスを借り切って亀岡迄行き、其所から保津川下りて半日の行楽の後散会という構想に家族同伴と遠地者歓迎の意味で往復旅費は会費から支給という名案だったので。併し結局集ったのは寄書のとおりで十二年前の大学生活を思い出し舞奴の踊りなど一層おぼえました。(藤島啓記)

